

短歌との出会い

船橋 拡光

小学校五六年生の頃だったと思う。我が家の軒下にかかる風鈴の短冊に書かれた啄木の歌の意を、私に説明するひとがいた。そのひとはいささか興奮気味に、これは戯れに背負ったお母さんが軽くて三步も歩けなかったのだ、と言った。子供だてらにその歌の
カウンタ・イントゥ・イデア・オブ

反直観的な表現に魅力を感じた私は、そのひとの説明に素直に感動すると同時に、それを書いたタクボクというヘンな人名も記憶することになった。

何年か経て、本屋で目に留まった啄木の歌集を手にとって読んでみた。同じ感動を求めて開いたページには、中学生の私にはどれもネクラの歌ばかり。気分が落ち込む気がして、本を閉じてしまった。以降、短歌空白時代が長く続いた。

それから二十数年。街で見かけた奈良のキャンペーン広告（だつたろうか）のコピーとして載っていた笠女郎の恋歌は、私に同じ感動をよみがえらせた。

朝霧のおほに相見しひとゆゑに命死ぬべく恋ひわたるかも

女郎の恋の苦しみは千三百年の時を経てまなお色褪せず、いま我々の心を響かせていることに衝撃を覚えた。

さて、短歌の詠みを教えてくれたあのひとだが、だれだったのか正直まったくわからない。たまたま居合わせた家族の客人なのか、親戚の人なのか、男だったか女だったかさえも覚えていない。だが、もし再会が叶うのであれば、いま拙いながらも短歌を詠んでいますと話してみたい。